⑳筆捨石(佐名伝)

佐名伝の南を流れる吉野川の清流のなかに、ふしぎなかたち、おもしろいかたちをした奇岩がしょう立して、ひとつの巨大な島をなしている景色のすばらしくいいところがある。

大水がでるたびに、その奇岩がくずれたり流されたりして、おもしろさ、うつくしさはすくなくなっているが、それでも現存しており、村の人たちはこれを「筆捨石」と呼んでいる。むかし、巨勢の金岡が佐名伝を通りかかって、この景色をみて心打たれ、これを絵にかきとどめておきたいと考えて、村に足をとどめて毎日写生にでかけた。

ところがいくたびに奇岩はそのすがたを変えているため、かきあらためねばならず、数日そういうことをくりかえしたが、いつもいつもかきなおしばかりで、どうしても絵を完成することができず、ついに筆を捨てて村を去ったといういい伝えから、その呼び名があるわけである。

岩が日々そのすがたを変えるとみられるほどに、そのころの奇岩の風景が、おそらく見事なものであったにちがいなく、この伝承がそれを語っており、その面影は今にのこっている。